

平成二十七年 度 第一回 入学試験問題

国語

【受験上の注意事項】

- 一、試験時間は五十分で、百点満点です。
- 二、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
- 三、解答用紙はこの冊子（きょうし）の間にはさんであります。
- 四、受験番号・氏名を解答用紙の決められた欄（らん）にかならず記入しなさい。
- 五、問題は八ページ・四題あります。問題がぬけていたり、印刷がはっきりしない場合は申し出なさい。
- 六、各問題とも解答は解答用紙の決められたところに記入しなさい。
- 七、何か用事ができた時はだまって手をあげなさい。ただし、問題の内容についての質問はできません。
- 八、解答用紙だけを提出し、問題用紙は持ち帰ってかまいません。

藤嶺学園藤沢中学校

一 次の①～⑧の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 品位がうたがわれる。 ② 家臣をたずさえる。
- ③ 剣道の技を極める。 ④ 富士山を借景とした作品。
- ⑤ アイチャクがわく。 ⑥ 試験にシヨウジュンを合わせる。
- ⑦ ストレスでイが痛い。 ⑧ ハガネのように強い体。

二 1～2のそれぞれの問いに答えなさい。

1 次の例のように二つ数字が使われている四字熟語を四つ答えなさい。 (例) 朝三暮四

2 次の①～④の字と同じ読みの漢字を後のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 山 ② 武 ③ 河 ④ 森

ア 接 イ 比 ウ 式 エ 針 オ 楽 カ 夢 キ 残 ク 花

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

(特に指示がない場合、句読点や記号は一字に数えます)

〈本文までのあらすじ〉

佃航平は規模こそ小さいが高い技術力を持つ佃製作所の社長である。佃製作所は前年、エ
ンジン部門で競合している大企業ナカシマ工業から、言いがかりに近い特許侵害の訴訟を受け
ていた。一時は倒産するしかない、とされていた佃製作所であったが、弁護士力の力によって有
利な和解を成立させた。

「世間様は世間様で、いろいろなことをいうだろうしね」

そういつて母はちらりと利菜を見た。「学校であれこれいわれたらしいよ。」^① 利菜んちはいいなっ

て」

「なんで利菜の友だちがそんなこと知ってるんだい」

「そら知ってるわよ、中学生だもん」

驚いてきた佃に、母は呆れてみせた。「新聞ぐらいは読むよ。ねえ」

返事はなく、利菜は硬い横顔を見せたまま。連ドラは※佳境のようだが、利菜の意識はテレビで
はなく、こつちに向けられているのがそれとなくわかった。そのとき、リモコンでスイッチを切り、
利菜はふいと立ちあがると二階へ上がっていった。

「難しい年頃だねえ」

母は※嘆息混じりに、両手を腰にあてた。「だけどさ、あの子はあの子なりに、いろいろ心配してるよ」

「わかつてるさ」

「こういうとき、母親がいると楽なんだけどね」

母は意味ありげな目で、佃を見る。

「それはいつてもしょうがない」

「まったく、あんたも父さんに似て、頑固だねえ」

母はそそくさと立ち上がると、流しで湯飲みを洗いはじめた。

「おい、入っていいか」

「どうぞ」

虚ろな返事にドアを開けると、利菜は壁際のベッドに横になってマンガを読んでいた。佃は勉強机の椅子を引いてそれにかけ、こちらを振り向きもしない娘を眺める。

「なんか学校でいわれたか？」

佃はきいた。返ってきたのは、「別に」、というこたえ。

「そうか……。あんまりいい話じゃないんで、② いままできちんと話をしなかったけど、実はパパの会社、訴訟に巻き込まれちゃってな。それで――」

無関心を装う利菜は、マンガ本のページを捲る。「それで、この半年ぐらい裁判してきたんだ。

訴えられて、今度はこっちが訴えてつていう、まあなんていうか※どろじあい泥仕合みたいな訴訟だったんだけど、結局、和解になった」

仰向けのまま、じっと利菜の視線はマンガを見上げている。

「聞いているか、利菜」

「だから、なによ」

めんどくさそうな返事。

「だからさ、もう心配ないつてこと。それに、長いこと会社やってたら、こういうふうな訴訟に巻き込まれたり、一時的に大金が入ってきたりつてことはあると思うんだよ。友だちがいろいろいかも知れないけど、まあ、なんていうか、気にしないほうがいい」

※「セレブじゃないよね、ウチは」

ふと、利菜がそんなことをいつて、立ち上がりかけた佃を制した。

「なんのことだい」

「セレブだつていうんだ、あたしのこと」

「セレブ？」

佃は思わず利菜の顔をまじまじと見てしまった。まったく子供というのは予想もつかないことをいうものだ。「誰がいつてるんだい、そんなこと」

「ヒロミ」

利菜の学校の仲間は、時々遊びに来ることがあるが、名前と顔は一致しない。首を傾げていると、利菜は思いがけないことをいつた。

「その子んち、この前倒産してさ。もうすぐ転校するつて」

佃は言葉をなくして娘を見た。

そういうことか。

いま、学校で利菜が置かれている状況がわかった気がしたからだ。五十六億円という、中学生からすると想像もつかないほどの大金を得た自分の父親。だが、その一方で倒産し、私立中学の退学を余儀なくされている友だちがいる。

それも社会の一断面といえはその通りかも知れないが、中学生の娘たちにしてみれば、③ あまりに残酷な対比だったろう。

「そうか……。残念だったな」

「止めてよ、そういう口先だけの慰め。ヒロミだつてさ、そんな言い方されたら、マジで気分が悪くなるよ」

マンガをベッドに放り出し、利菜は起き上がった。向けてきた眼差しには、「④」が入り混じっている。

「別に口先だけじゃないさ」

佃は淡々とこたえた。「裁判のこと、どうしてお前にいわなかったか、わかるか？ それはな、一歩間違えば、ウチもまた倒産する可能性があったからなんだ。優秀な弁護士がつかけてくれて、和解に持ち込めたからよかったけど、そうじゃなかったら危なかった。その子の家が倒産した理由は知らないけど、ウチだつて紙一重だったんだ」

「だったらそのお金、ヒロミの家に貸してやつてよ！」

利菜はいった。「何十億円も必要ないんでしょ？ だったら貸してやつてよ」

「残念だけど、それはできないよ、利菜」

佃は言い聞かせるようにいつた。「お金つていうのは⑤ そういうものじゃない。たとえ利菜の友だちでも、温情でお金を出すわけにはいかないよ。そんなことをしたら、その人はもっと不幸になる。そういうもんなんだ」

もの凄いい形相で、利菜は睨み付けてきた。

「結局、パパだつて、ナカシマ工業と同じじゃない」

利菜は決め付けた。「考えてるのは、⑥」のことばかり」

「違うぞ、利菜」佃はこたえた。

「じゃあ、なんなの？ なんのためにそんなお金がいるの？ 片や苦しんでいる人がいるつていうのに見殺しにする。最低じゃない」

「そのうちわかるよ、利菜にも」

これ以上話しても進展はなさそうだった。椅子から立ち上がった佃は、⑦ うつすらと涙を浮かべている娘を見下ろした。「パパは、お前やおばあちゃんが困ったり、悲しんだりしないように、全力を尽くしてる。それだけさ」

「私たちのためだなんていわないでよね」
利菜は言い返してきた。「自分だけ悲劇のヒーローみたいじゃない。狹いよ、そんなの。パパなんて会社も仕事も、みんな(⑧)のためなんですよ」

娘の部屋からすごい退散したものの、眠る気になれず、リビングのソファに横になった。
やれやれである。ようやく訴訟が解決したかと思えば、会社でも難問山積。さらに家までもだ。

(『下町ロケット』池井戸潤より)

※佳境…おもしろい場面

嘆息…ため息をつくこと

泥仕合…互いに相手を非難しあう、みにくい争い

セレブ…ここではお金持ちのこと

余儀なく…そうするしかない

問一 — 部①「利菜んちはいいな」とありますが、利菜の友だちがこのように言うのはなぜですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問二 — 部②「いままできちんと話をしなかった」とありますが、なぜ話をしなかったのですか。本文中から十八字でぬき出して答えなさい。

問三 — 部③「あまりに残酷な対比」とありますが、何と何を比べているのですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問四 空らん④にあてはまる語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悲痛 イ 混乱 ウ 憎悪 エ 嫉妬

問五 — 部⑤「そういうもの」とありますが、どういうものですか。説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を本文中より二字でぬき出して答えなさい。

【二字】で貸すもの

- 4 -

問六 — 部⑦「うつすらと涙を浮かべている」とありますが、この時の利菜の気持ちとしてあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 口ではきれいなことを言いながら手助けしてくれない父への怒り。

イ 大変な思いをしながら会社をまとめる忙しい父への理解。

ウ 友だちが大変な時になにもしてあげられない自分へのいらだち。

エ 自分のせいではないことで周りから悪口を言われることへのくやしき。

問七 空らん⑥・⑧にあてはまる語を次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は一度しか使えないものとする。

ア お金 イ 会社 ウ 家族 エ 技術 オ 自分

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

(特に指示がない場合、句読点や記号は一字に数えます)

私の子どものころや若いころのことを少し紹介してみよう。そのころの私の経験から「伝える力」を伸ばすためのヒントを伝えることができるかもしれません。あるいは、コミュニケーションに悩んでいる人にヒントを与えることができるかもしれません。

今では、テレビに出たり、大学で講義をしたり、話し方や※プレゼンテーションの仕方に関する本を書いたりしていますが(この本もそうですね)、子どものころの私はとても内気で引込み思案、人見知りもしました。

今でもよく覚えている光景があります。小学校六年生のときのことです。何かの作業か話し合いをするために、放課後に残っていました。教室に私と同級生何人かが集まっていました。私以外は全員、女の子です。

女の子たちはなにやら活発に話し合っていたようですが、私は椅子に一人ぼつねんと座っていました。ひと言も、何も言うことができませんでした。①寂しい思い出です。

それでも、高校生ぐらいになると、多少は活発に行動するようになりました。少なくとも私自身は、クラスメートたちともそれなりに積極的に交流しているつもりでした。

ところが、あるとき、②大きな衝撃が私を襲いました。まあ、そう書くと、いかにも大げさですが、ほんとうはたいしたことではありません。『ニュースセンター845』でキャスターをしているころに高校の同窓会があつて、同じクラスにいた女性から、「テレビに出ている池上君が同期であることは知っていたけれど、まさか同じクラスだったとは知らなかった」と言われたのです。

その女性は高校時代、私のすぐ後ろの席に座っていたこともありましたが、その間、彼女は授業中、

- 5 -

毎日、私の背中を見ていたわけです。「おれはそんなに存在感がなかったのか……」とガツクリしたものです。

NHKに入ってから、基本的には内気な性格のままでした。周りにもそのように思われていたようです。

入局したあとの四月と五月に合宿研修があり、研修を終えて、最初の赴任地である島根県の松江に行くとき、同期のアナウンサーが私に言ってくれたこともよく覚えています。

「池上君、キミは地方に行って、現場に行つて、きつと苦労はすると思うけれど、がんばれよ」

同期はそう言つて励ましてくれました。引つ込み思案であることを見抜いて、そう言ってくれたのでしょね。

松江に赴任してから大変でした。新聞社やNHKは新人記者にまず警察を担当させます。どうしてでしょうか。「警察には取材する情報が豊富にある」「世の中の裏側を学べる」「取材力をつけられる」。この三点が主な理由です。事件や事故といった「異変」のかなりの部分は警察に集められますから。

赴任後は早速、松江警察署と島根県警本部を訪れました。名刺を渡しつつ、署長、副署長、刑事課長などの「お偉方」にも挨拶しました。「おつ、よろしく」なんて、皆さん、明るく挨拶してくれました。

このときは一年上の先輩も同行してくれていました。

翌日から一人で行くことになりました。そうすると、前日とはまるで違う対応になります。刑事課に顔を出すと、「おまえは誰だ?」「この若造、何しに来たんだ?」と冷たい視線。刑事たちはそうした表情で私を見ます。

私もまだ若輩者。警察なんて、これまで縁がなかったし、取材も初めての体験です。しかも、内気で人見知り。怖いんですよね。足はすくんで、顔は引きつっていたかもしれせん。自分の思いなど、とても伝えられる状況ではありませんでした。

研修では「御用聞きにはなるな」と教えられていました。

「変わったこと、ありませんか?」。そんな聞き方はするな、と叩き込まれていました。「ないよ」と言われたら、それきり。先には何も進みません。警察官が「いやー、昨日はこんな事件があったさ」などとは言ってくれないのです。

「⑤」、どうするか。世間話をしながら、親しくなれ。研修ではそう教わっていましたが、これがなんとも難しい。特に私は人見知りでしたし。

でももちろん、仕事となれば、そんなことは言っていられません。それに、子どものころから憧れていた記者という仕事に、念願かなって就くことができたのです。スタートでつまづくわけにはいきません。

⑥ 私が考えたことは「野球」でした。当時は今以上に野球がたいへん人気で、ひいきのチームを持っている人も大勢いました。

島根県の警察官には、どうも巨人ファンが多いらしいということがわかりました。それで私は、前日のプロ野球の結果を調べておいて、「昨日、巨人、勝ちましたね」とか「昨日は惜しかったですね。チャンスはたくさんあったのに、あと一本が出なかった」などと巨人を中心に野球ネタを振ってみました。

「⑦」、残念ながら、反応はさっぱりでした。考えてみると、当たり前です。警察官は人間の心理を読むプロ。私の甘い考えは見事に見透かされていたのです。私が実は巨人ファンではないことも読まれていたのかもしれませんが。

なかなか相手にしてもらえない日が続ききました。つらかったですね。毎日毎日、顔を出して、挨拶をして、顔を覚えてもらおうように努めるしかありませんでした。

そのうちに、相手が暇を持て余しているようなときに顔を出せば、相手も応対してくれることに気づきました。警察官は、当直勤務があります。ふだんは外を聞き込みに回っている刑事も、当番のときは、警察署の中で当直します。当直も勤務中ですから、まさかテレビを見るわけにはいきません。事件が起きなければ、暇なのです。そこで、夜の10時や11時ごろ、警察署に寄つて、刑事と世間話をするように心がけました。

これを繰り返していると、そのうちに相手も私という人間を認識するようになってきます。ある古参刑事は、私を刑事部屋に連れて行き、なぜか調書を机の上に置いたままトイレに立ちました。これぞ「阿吽の呼吸」ですね。彼としては、記者に情報を漏らしたわけではない、^⑧ 記者が調書を勝手に見たのだという状況を作ってくれたのです。

「⑨」、別のベテラン刑事に、休みの日、街中でバッタリ出会いました。「おうッ、おまえか。明日の朝八時に署に顔を出せよ」。刑事はそれだけ言つて、去っていきました。

言われたまま、翌朝、署にカメラを持って行くと、刑事たちのガサ入れ（家宅搜索を意味する警察の隠語）でした。刑事について行くことで、家宅搜索に入る瞬間の映像や、刑事が捜査対象人物に對して、裁判所発行の家宅搜索令状を読み上げる様子を映像に収めることができました。

要は信頼関係を築くことなのです。相手が暇を持て余しているときを見計らつて訪問することで成果を上げているセールスマンの話を聞いたことがあります。その人は小売店主に商品売り込みの仕事でした。雨の日を狙つて、訪問を繰り返したというのです。

雨の日はお客さんの数が減ります。小売店主としては暇になってしまします。そんなとき、傘をさしてセールスマンがセールスにやってくると、本人は暇ですし、「雨の日にもやってくるのか」と、セールスマンの熱心に打たれます。こうなれば、ほぼ100パーセントの確率で商品売り込みに成功したそうです。

警察を担当する記者は検察庁や裁判所も取材します。そうすると、警察官だけでなく、検事とも話すことになりました。これまでの人生では、警察官同様、縁のなかった人たちです。

事件の被害者、さらには容疑者に話を聞く機会も増えていきます。ふだん一般の人が会うことはいだらうというタイプの人たちとの会話がが増えていったのです。これが、どれだけ私の人生にとつてプラスになっていることか。こんな経験を積んでいるうちに、フツ気がついてみると、見ず知らずの

人とも平気で話ができるようになっていました。内気で、引つ込み思案で、人見知りだった私は、いっ
つしか変わっていたのです。

(『伝える力2』池上彰より)

※プレゼンテーション：発表

古参：ベテラン

阿吽の呼吸：二人以上の人が何かをした時にぴったりと気持ちが合うこと

問一 —— 部①「寂しい思い出」とありますが、この「思い出」からどのようなことがわかります
か。「くっていたということ」につながるように、本文中から二十八字でぬき出して答えなさい。

問二 —— 部②「大きな衝撃が私を襲いました」とありますが、「衝撃」を受けた結果、作者はど
う思いましたか。本文中から十七字でぬき出して答えなさい。

問三 —— 部③「御用聞きにはなるな」とありますが、ではどうすればよいと言われていたのです
か。本文中から十四字でぬき出して答えなさい。

問四 —— 部④「こんな事件」とありますが、作者は「事件」のことを本文中の他の部分では何と
表現していますか。漢字二字でぬき出して答えなさい。

問五 空らん⑤・⑦・⑨に入る言葉として最もふさわしいものを、それぞれ次の中から選び、記号で
答えなさい。

ア しかし イ あるいは ウ では エ そして

問六 —— 部⑥「私が考えたことは『野球』でした」とありますが、この試みが失敗した理由を
「くから」につながるように、本文中から十八字でぬき出して答えなさい。

問七 —— 部⑧「記者が調書を勝手に見たのだという状況を作ってくれたのです」とありますが、
このような状況を作るために作者は何が必要だと考えていますか。本文中から九字でぬき出し
て答えなさい。

問八 次の文が本文中からぬけています。入るのにふさわしい部分の直前の八字を答えなさい。

いわゆる引き継ぎ^つだったわけです。

第 一 回 入 試 国 語 解 答 用 紙

受 験 番 号

氏 名

得 点

一

①
②
③
める
④

⑤
⑥
⑦
⑧

二

①
②
③
④

①
②
③
④

三

問 一

問 二

問 三

問 四
問 五
で 貸 す も の
問 六

問 七
⑥
⑧

四

問 一
て いた と い う こ と

問 二

問 三

問 四
問 五
⑤
⑦
⑨

問 六
か ら

問 七

問 八
